

校内体制の充実と外部機関との連携による対応について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、親が多忙のため朝早く出勤し、帰宅も遅い家庭である。家庭では、親と関わる機会が少なく、家事なども1人で行っている。年度当初は登校していたが、家庭での悩みと学校における学業・友人関係の不安により欠席が続き、不登校となっている。

具体的な取組

組織力の向上

○SSW を講師として迎え、外部機関の役割や活用事例などの研修を実施する。



不登校加配教員連絡協議会の参加

○連絡協議会に参加することで、他校との情報共有や対応事例について知ることができた。

○不登校生徒の状態を把握するだけでなく、家庭が学校や外部機関と関わりをもつことが重要であり、学校から積極的に外部機関と連携を図っていく。

校内体制の強化

○不登校加配教員を中心にスクールカウンセラー、巡回心理士、担任、学年主任等で校内委員会を開催し、情報共有を図る。

○不登校加配教員による家庭連絡や外部機関との連携調整を実施する。

個々の不登校生徒への支援

○授業の様子をオンラインで配信し、家庭でも学習内容を確認できるように支援する。

○週に1度は電話連絡をし、生徒の日々の生活や取組などを確認するとともに、その情報を基に支援チームで対応を協議する。

成果

外部機関の役割や連携の方法について多くの教員が理解できた。その結果、教員の心理的負担の軽減につながるとともに、不登校生徒の家庭に対して様々な方法でアプローチをすることができるようになった。

課題

不登校生徒や保護者と連絡が取りづらい場合、情報の共有や家庭へのアプローチに時間がかかってしまう点が課題である。

エンカレッジルームについて

不登校生徒の状況

本校は在籍生徒数308名、うち不登校生徒が9名おり、出現率は2.92%となっている。今年度、不登校生徒対応のため「エンカレッジルーム」を開設し、常時利用する生徒が1名、不定期で登校する生徒が6～8名おり、学校に来れる機会が増えてきている。常時利用する生徒は対人関係に不安があり、実技教科以外はオンラインで授業を受けている。その他の生徒は不定期ではあるが登校し、教室に戻れる時は教室で授業を受けることができるようになってきている。

具体的な取組

○組織力の向上

ルーム開設時は不登校加配教員1名で対応しており、開設できる日が限られていた。サポートルーム教員、特支専門員・支援員、ボランティアの協力で7名体制となり、平日の常時開設が実現した。生徒は朝から登校し、生活のリズムを整えることができるようになった。

○不登校の減少・解消

1年半ほど不登校だった生徒がルームを利用し始め、半年後に教室に戻り、授業を受けられるようになった。入学から一度も登校できなかった3年の生徒が3年2学期からルームに通うようになった。他にもクラスに馴染めなかった生徒がルームで過ごして、落ちつくとクラスに戻れるようになってきている。

○個々の不登校生徒への支援

個々の生徒に合わせた学習補助を行っている。学習面で躓きのある生徒が多いが、無理に現在の授業内容を理解させようとせず、特に数学と英語においては、個々の生徒のレベルに合わせて勉強を教えている。7名の教員、特支専門員等がワークやプリントを用意し、基礎学力が身につくよう、分かるまで繰り返し学習指導を行っている。

○不登校加配教員連絡会等への参加

単なる見守りのルームにならないよう、校外での研修会にも積極的に参加し、指導方法の工夫、他校の実践、事例研究をとおして、いかに少ない時間の中で効率的に指導を行い、向学心を高め、教室に戻れるようにそれぞれの教員等が自己研鑽に励み、生徒との接し方も工夫している。



成果

長期間不登校の生徒が、すぐにクラスに入るのはハードルが高いが、ルームがあるなら行ってみたいと通い始め、最終的にクラスに戻れるようになる生徒も増えてきた。家からほとんど出られなかった生徒が、ルームに来て学校に少しでも通えるようになり、教育の機会をつくることができるようになってきている。

課題

加配教員は1名で、特支専門員・支援員、ボランティアで5名である。今年度はサポートルーム教員の協力があり、7名体制で毎日開設できているが、人手不足は否めない。

学習指導においては横の連携がとれないことがあり、生徒への指導にばらつき出てしまうことがある。

得意分野への取り組みを通して、自己肯定感を獲得し登校が実現した事例

不登校児童・生徒の状況

小学校の頃より登校しぶりが見られた生徒である。中学入学後も登校できず、1年次は98日、2年次は72日欠席であった。ひとり親家庭で兄も不登校であった。自身の好きなこと（運動）に登校意欲を見せるが、そうでない場合には全く気が向かず登校できなかつた。3年次、高校進学が目標になり、学習意欲が芽生え登校し始めた。

具体的な取組

・個々の不登校生徒への支援

【成功体験をエネルギーに】今年度も体育係に立候補し取り組んでいる。3年間の集大成となる今年度は、学級のみならず全校生徒をまとめる意識をもたせた。視野を広げ、体育祭成功に向け自主的かつ意欲的に取り組んだ。生徒本人は、大きな自信を獲得し登校日数を増やした。

・不登校生徒にかかる指定項目数値の減少及び解消

【生徒保護者との情報共有】

関係機関につなげることを担任が意識し定期的な連絡を行った。特に行事などの際は事前に連絡を行うことで、生徒や保護者との関係を良い状態で維持することができた。

・校内体制の強化

個別支援委員会を毎週水曜日に設定し、管理職、生活指導主任、養護教諭、特別支援教育コーディネーター、学年代表、カウンセラー、支援員が集い、多角的に生徒の様子を捉え情報共有を図った。SSWとの情報交換会も行うなど、校内体制の強化を図った。

・組織力の向上

「不登校生徒対応」「課題のある生徒への対応」「サポートルームについて」など、校内研修を特別支援教育に特化して行った。学年独自の生徒対応

とならないよう、校内で共通理解を図り、統一性をもって対応している。



成果

校内研修を通して、全教員が課題のある生徒への対応方法について学び取ることができた。否定されることを嫌う生徒が増えてきている本校で、生徒の気持ちに寄り添いながら対応できたことが不登校生徒の自己肯定感の高まりとなり登校につながった。

課題

一人一台端末を利用した取り組みなど、各校の実践内容を本校でも検討し、積極的に取り入れていきたい。